

### (3)、尖閣に 国産海底大油田を 夢見た男

#### 遙か東北から 琉球列島に 熱い眼差し 注いでいた男たち

テーブルに東シナ海の世界図を掲げ、何やら書き込んでいる男がいた。

傍らにはうず高く標本箱が積まれ、その中から採取した土石を取り出しては、じっと見入り、世界図に目をやっては、うなづきながら書き込んでいた。

海洋地質学者新野弘博士であった。永年にわたり東シナ海海底の地質調査を行い、「東支那海推定油田」を予言した男である。

新野は、1905年(明治38年)栃木県宇都宮市に生まれた。

1927年(昭和2年)、農林省水産講習所養殖科(現東京水産大学)を卒業し、東北帝大地質学科に進学した。

当時、南西諸島の地質研究は、国策的に台湾への傾斜志向の影響を受け、全く放置された状態であった。早稲田大学徳永重康博士は、宮古島に出土した哺乳類の化石研究から、第三紀には台湾と陸続きだったとの学説を発表した。が、南西諸島の地を訪れる研究者は少なかった。徳永は、この状況を憂い、「学界の恨事」と評していた。

他方、北国仙台の地に、日本列島最南端の地科学的特性に熱い視線を注ぎ、南西諸島や大東島の地質構造の解明に精力的に取り組んでいる男たちがいた。

矢部長克、半沢正四郎博士の率いる東北帝国大学古生物学地質教室の研究グループだった。

矢部博士らが実施した北大東島での昭和9年と11年の地質ボーリングは、深度209メートル、431メートルに達し、世界最長を記録した。

このコア解析を通して大東島の石灰岩の構造と生成の過程が明らかになった。

今日では、赤道付近で生まれた環礁で、琉球列島に近づきながら珊瑚礁の島に発達してきたことが判明している。

半沢博士らは、小笠原や南西諸島の隆起珊瑚礁の有孔虫研究を皮切りに、台湾までの広範囲の領域に及ぶ地質研究を行っていた。昭和10年、半沢は、これまで研究成果をまとめて、「Topography and Geology of The Ryukiu Islands」(和訳「琉球群島の地形及び地質」)を発表した。



半沢 正四郎

この論文は、南西諸島の地質学的構造は、初めて組織的系統的に分類編年された画期的なものだった。これは戦後、琉球政府によって翻訳・刊行され、戦後沖縄の地下資源開発の基本資料とされた。なお、この「琉球列島の地形地質及び鉱床」(1955年刊)については、次項④で紹介する。

東北帝大地質研究グループは、南西諸島の古生物や地質研究に精力的に取り組む、日本列島～南西諸島～台湾の地質学的生成の解明の鍵は、広大な中国大陸と東シナ海にあると考えていた。

## 東シナ海の海底地形と海底沈殿物

新野は、このような海洋地質学に関心が芽生えかけた時期に、入学した。

彼は、海底資源—海底油田の分野に興味をいだき、朝鮮海峡東部～男女列島～尖閣諸島に及ぶ広大な東シナ海大陸棚に引き付けられていた。

海底には、陸から流水で運ばれた有機物や海洋生物の遺体などが堆積している。これら海底沈殿物は、科学的变化を受けて天然ガスや石油が生成されることから、東シナ海の海底地形や低質（海底沈殿物）に関心があつた。

大陸棚の境界を百尋線で示すと、その内側の海底地形（海底基盤）は、ため池のように深い谷底状を示している。

右下に模式図を示したが、この海底谷を取り囲むように縁辺は隆起して海崖状になり、堆積した沈殿物をせき止めるダム役割を果たしている。

この百尋線は、水深 100～200 メーターに止まっているが、南西部付近では水中から突出して、尖閣諸島の島々を形成している。大陸から持ち運ばれた膨大な有機物、栄養分、海洋生物などの遺骸は、水中深く沈殿し、海底に堆積している。

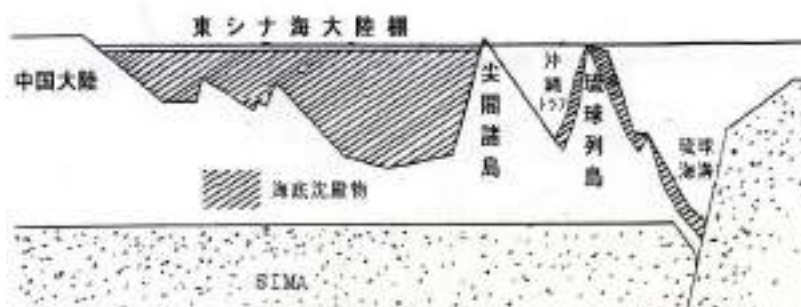
新野が目をつけたのは、海底地形と堆積した地層である。

もしも、この海底谷の地形が数千メートルに及ぶ深さであれば、幾千万年、幾億年も海底に積み積もった沈殿物は、膨大な厚さで堆積していることになる。

堆積した地層が第三紀海成層であれば、地中深くで、地科学的变化を受けて、石油になり変わっているはずだ。



新野 弘



東シナ海大陸棚の海底地形と海底沈殿物堆積の模式図

### 30 余年に及ぶ海底土石調査から 海底油田 確信

新野は、この東シナ海に、石油母岩となる第三紀海成層が分布しておれば、海底油田が期待できるとして、30 数年にわたり、海底沈殿物、底質の岩土石を蒐集し、調査研究を続けていた。

この東支那海の海底地形及び底質については、昭和七年以降機会あるごとに資料蒐集に専念し、農林省水産局の漁業監視船、水産試験場指導船、漁業会社の漁船及び水路部、大学等の調査船により集められた資料を入手し、東支那海の海底の地形、地質を察知する手掛かりを得た。・・・また、沖縄を中心とするよみうり号調査船とその母船による海底探査に参加し、琉球列島付近海底地形、底質の資料を得ることができたし、また厚生省の国立公園調査に際し、各島嶼の踏査の機会が得られたので海底地形の推測資料を得ることができた。九州西岸より朝鮮海峡にわたっては、沿岸の石炭地質調査及び漁業調査に伴う海底資料の蒐集により、東支那海一部海広の地質を開明することができた。(オーシャンエイジ 特別レポート「東支那海の宝庫をさぐる 尖閣列島周辺の海底地質調査」 新野弘 1970.年 10 月号)

大陸棚の海底資料を調べてみると、石油があると確信せざるを得なかった。

1961 年(昭和 36 年) これまでの研究成果をまとめて、米国ウッズ・ホール海洋研究所の E・H・エメリー博士と共著で、米国地質学会誌へ「東シナ海及び南シナ海浅海部の沈積層」(英文)の論文を発表した。

その前年に、アラビア石油の山下太郎がアラビア湾で、大油田を掘り当てた。

これは、日本にとって大朗報だった。石油関係者は飛び上がって喜んだに違いない。新野がその翌年に、共同論文を発表したのは偶然でないように思える。

山下の快挙は、日本の海底油田時代の到来を告げる。そう考えての発表だった。この東シナ海大陸棚にも、海底大油田があるのだと、一刻も早く、この国内油田を調査すべしと、日本政府や国内石油業界に訴え続けていた。

大陸棚の堆積物については数千点集め分類してみた。・・第 3 紀層の分布、厚さ、地質構造・・をまず全域にわたり調査し、その結論に基づき、最も注目される地点に試錐するとすれば、東支那海に果たして予期どおりの油田の有無が確かめられる・・東亜の油田は主として新第 3 紀海成層に胚胎し、大陸よりの圧力によりわん曲した島弧の内側に多く分布がみられる。この観点からして、東支那海は極めてよくその条件を具えている。・・一刻も早く調査を開始したいと考える。外国油田への全面依存は必ずしも採るべき策の最上とはいえない。

(「東亜大陸縁辺の大陸棚の鉱物資源」 新野弘 月刊石油 1966.5 月号)

## 日本の石油業界 海底油田、日本海に集中

油田開発の歴史は、陸上から海洋へ移行していた。

日本においては、1890年（明治23年）には、いち早く新潟県尼瀬海岸の油田掘削に成功している。無論、水深が浅く、波静かな海岸であり、木材を組んだやぐらよる掘削だった。

海底油田近代的な探鉱法による開発は、1956年（昭和31年）石油開発公団事業本部（SK）による秋田県沖合での海上地震探査、重力探査を皮切りに、以後、SK、通産省地質調査所、帝国石油、出光興産によって、わが国の油田地帯である日本海側の秋田～新潟沖において盛んに実施されてきた。

探鉱はスカーパー、エアガン、爆薬、航空磁力、地震等々による物理探査である。

1958年6月には、SKによって動式掘削装置白竜号が建造された。白竜号は、日本近海の海底油田開発が目的であったため、浅海用で稼働水域は水深25m以浅（沖合約4km）まであり、秋田沖、新潟沖で、試掘などに活躍した。

石油開発公団編「海洋石油開発」（昭和44年9月刊）によれば、1969年1月まで、白竜号によって51坑が掘削され、土崎沖、頸城沖の2油田が開発、申川、橋本、吹浦、東新潟などの油田、ガス田が海域まで延長されたとある。



1960年代に海底油田開発で活躍した移動式海洋掘削装置「白竜号」

また、同書に、日本近海の「物理探鉱調査図」（後段に掲載）があった。

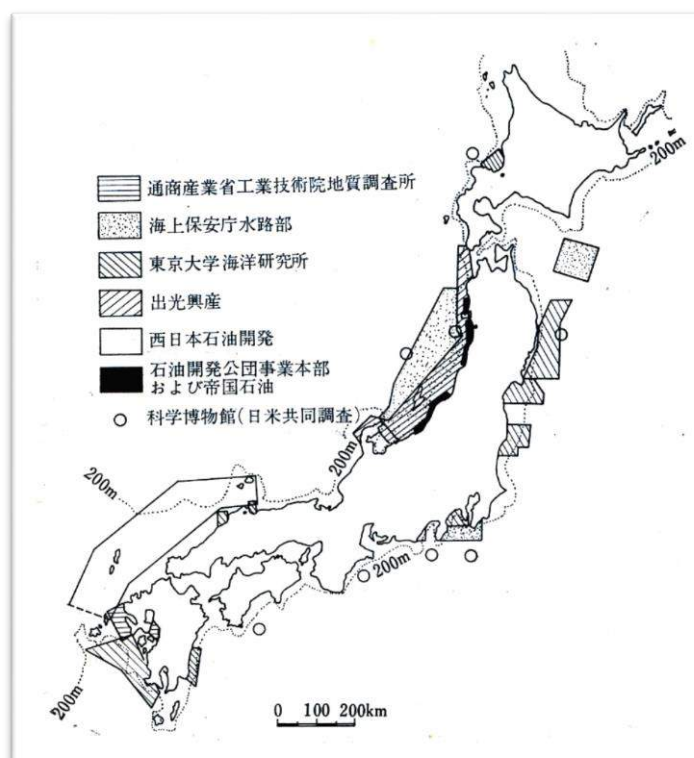
これ見て驚いた。海底油田の探査は、何も秋田～新潟沖だけでない。

日本海側は、北海道から山陰、北九州沖。さらには太平洋側の三陸沖、房総沖、鹿児島沖までである。日本近海の大半に海底油田があると考えたのか、別表の調査状況を見ると、スカーパー、地震探鉱、エアガン等々の調査がなされていた。

調査機関はSK、帝石、出光の他に、新たに西日本石油開発、東京大学海洋研究所、海上保安庁水路部などが加わっている。日本近海は、海底油田探しブームの如きである。

新野が「東支那海の海底油田」の探鉱を呼びかけたのは、丁度この時期で、タイミングが悪すぎたのか。調査は目白押しで、繁忙を極め、彼の提案に目を向ける余裕はなかったかと思う。たとえ、注視したとしても、スケールの大きさに驚き、油田や油徴が未確認のダダ広い東シナ海を調査するには、自分たちの手に余

り、如何ともし難いとして、敬遠されたのだろうか。



日本近海の物理探鉱調査（昭和 32 年～43 年度）  
（「海洋開発 石油開発公団」より）

### 海外開発ブームへ警鐘 外国油田への依存 採るべきでない

1960 年アラビア石油の山下太郎がアラビア湾で、大油田を掘り当てた。これを契機に、日本において海外石油開発ブームが沸き起こっていた。

中東からインドネシア（海域）、果てはアラスカ、カナダ（陸域）などの広大な海外鉱区を取得し、莫大な投資を行って、海外油田開発に勤しんでいた。

#### わが国企業の海外油田開発対象地域（海域分）

会社名	進出年	進出地域名	取得鉱区(km <sup>2</sup> )
アラビア石油	1957	サウジアラビア・クウェート	7,000
インドネシア石油	1965	北スマトラ沖合	23,000
〃 〃	1966	東カリマンタン沖	34,000
九州石油開発	1966	南カリマンタン沖	130,000
〃 〃	1967	南東カリマンタン沖	65,000
アブダビ石油	1967	アブダビ沖	6,500

これに対し、新野は、「外国油田への全面依存は必ずしも採るべき策の最上とはいい難い」とし、東シナ海の国内海底油田の探査、開発を呼び掛けている。

男女列島—沖縄西方間の大陸棚約 30 k m<sup>2</sup>ならば、経費もさほど要せずに 2 ヶ年ほどで掛からずに、調査が可能であると、「底質調査」と「構造調査」の具体的方法まで示し、強く訴えた。

・・累計調査日数通算で約 1 年とみると、九州—台湾間の 70k m<sup>2</sup>のうち、男女列島—沖縄西方間の大陸棚約 30k m<sup>2</sup>を十分調査しうる。

1、底質調査 一般官庁船、学校または漁船でも行ないうる。

器具は数万円程度のもので十分役立ち、試料の蒐集を行ない、これに基づき基盤分布図を作る。

2、構造調査 (a)まず音波または超音波による比較的海底に深層の地質構造を調べる。このためにはスパーカー、エアガン、ラス等船上で航路下の地質構造を記録する方式による。これ等の機械は 1 台 1,000 万円程度の国産で間に合わせるとし、官庁船、学校船等に装備し、記録を集める。(b)人工地震による探査は、この調査完了後別の機会に行なう。これには漁業との関係を考慮しなければならない。

(c)重力、磁力探査は装置のある装置のある官庁船、学校船で大略の調査を行なう。(d)さく井船による探査は最後の段階で実施する。

以上の推定油田の概査には、経費として約 2 億円を計上したならば 2 ヶ年間で十分に施行し得られ、存否の可能を判断し得られよう。

(前出「月刊石油 1966.年 5 月号」より)

だが、彼のこの呼びかけに対し、誰一人、目を向ける者はいなかった。

## 国内石油業界 日本近海大陸棚 “東シナ海除く”

前出の「海洋石油開発」は、1968 年エカフエの東シナ海海底油田発表の翌年に刊行されている。(1969 年 1 月までの内容が盛り込まれている)。

わが国の石油開発業界を代表する石油開発公団 (SK) が編集しており、日本の海洋石油開発状況ばかりでなく、当時の開発業界の認識が読み取れよう。

同書の「日本周辺の大陸棚」は、「東シナ海を除く」として、「北海道周辺、日本海、太平洋、九州周辺」の範囲にとどまっている。

周知のように 1968 年エカフエによる東シナ海海底油田有望の情報は、世界の石油業界に大きな衝撃を与えた。沖懇委高岡大輔は、日本政府に働きかけ、7 月

には総理府（現内閣府）に自らが団長となり、尖閣諸島予備調査を実施させた。

翌8月には、彼は、総理府及び各界関係者に参加を求めて「尖閣列島調査報告会」を行った。（報告会の内容は、本HP「文献書庫」の高岡の稿で触れている。ご参照下さい）。

同報告会には、新野の他、調査機関から石油開発公団技術部、通産省地質調査所、海上保安庁水路部が参加した。高岡は、この席で、日本側は、先行して尖閣諸島海域の油田調査を急ぎ行うべきと主張した。これに対する公団ら石油開発関係者は、さほど意欲的でなかったようだ。この背景に、当時沖縄は米軍統治下にあり、同海域の鉱区権問題、また大陸棚に関する問題などあったと考えられる。

高岡は、このままでは時機を逸するとして、「大体、指をくわいて外国企業のなすがまま黙っていてよいであろうか」と疑問を呈した。公団は、百戦錬磨の石油探査技術陣を擁していたが、「直接この海域において、公団独自の探鉱作業は探鉱作業を担当すること出来ない、業務の範囲内で積極的に協力したいと思っている」と述べ、さだめし彼を困惑させたであろう。幸い、新野が勤務していた東海大学は海洋実習船を有していた。



高岡 大輔

高岡は、南方同胞援護会吉田嗣延らと計らい、急ぎ、東海大学丸Ⅱ世号による油田調査の準備にとり掛かることとなった。

報告会おけるこれらの経緯は、いみじくも、当時の日本石油開発業界の「東シナ海・尖閣諸島」に対する消極姿勢を如実に物語っているようだ。

先の「海洋石油開発」（石油公団編）のなかで、「日本周辺の大陸棚」は「東シナ海を除く」としたことは、これを象徴している。

とは云え、1969年2月、公団は沖縄出身公団職員の名義で、尖閣諸島海域に鉱業権を申請した。以後、積極姿勢に転じることになるのだが。

ここで言いたいことは、公団のことでない。

新野は60年代初頭からは東シナ海海底油田の探査を呼びかけていた。

だが、国内の石油開発関係者には、東シナ海は埒外としていたことである。

悲しきかな、彼が幾ら声を大にして叫んでも、暖簾に手押しだった。日本政府はじめ日本の石油関係者は、誰一人として、耳を傾ける者はいなかった。

## 米石油業界が着目？ 国連エカフエ調査に進展 存在裏付ける

1961年（昭和36年）新野は、ウッズ・ホール海洋研究所のE・H・エメリー博士と共著で、米国地質学会誌へ「東シナ海及び南シナ海浅海部の沈積層」（英

文)の論文を発表したことは前述した。

この論文はメジャー、アメリカの石油業界から着目された。

昭和 41 年には、国連のエカフエ (ECAFE アジア極東経済委員会) に、石油資源探索プロジェクトを立案推進する C C O P が設けられ、東シナ海の海底油田調査がスタートし、アメリカ海軍等の協力を得て、調査は開始された。

昭和 43 年、エカフエは、尖閣諸島を含む東シナ海と黄海に、海底油田が存在する可能性があると発表した。

新野の予言は見事に的中したのだ。

UPI 電は「・・・1、報告によれば、大陸ダナには主に第三紀の沈殿物が約百万立方キ。あり、”世界で最も豊富な石油資源の一つ”になるかもしれない。1、人工地震法による調査では、大陸棚、黄海両地域の海底面下の沈殿層でさがし当てた。この層が石油およびガスを蔵していると思われる」(沖縄タイムス 1969.6.7)と伝えた。



エカフエ調査による第三紀層の厚さ

エカフエの海底油田の発表で、尖閣諸島は、一躍「石油の島」として、脚光を浴びた。日本政府も、石油業界も、てんやわんやの騒ぎとなった。

だが、なす術は知らない。この時に躍り出たのが、高岡である。彼は、政府の尻を叩き、総理府による尖閣諸島予備調査を実施させたことは前述した。

(この調査は、本 HP「文献書庫」の先の高岡と大城の稿で触れている)

団長の高岡は、宮城新昌を回顧し、次のように感慨している。

・・・宮城新昌氏が十年前に、尖閣列島周辺海域は、その海底の地形からして必らず素晴らしい漁場であると説明されたその地域が、一大油田地帯になる可能性があるとなれば、これこそ、沖縄に一大福音をもたらすだろう。

(尖閣列島周辺海域の学術調査に参加して 季刊沖縄 56 号 1971, 3)

宮城新昌は、尖閣に一大栽培漁業基地建設を夢見たが、幻に終わった。

彼の死後、凶らずも、新野によって、東シナ海尖閣海域に、海底石油資源埋蔵の可能性が示された。これは二人が力説して止まない”中国大陸給源”の考えに由来するものだった。広大な東シナ海へ流入した膨大な有機物、滋養成分、海洋



生物の遺骸などが、水中深く沈殿・堆積して、終局には黒いドロドロの油性を帯びた石油母岩—第三紀海成層になり変わっていた。

高岡らは、新野の言う海底大油田が開発できれば、わが国に計り知れない利益をもたらすとして、政府に海底地質調査の必要性を強く訴えた。

## 新野 自ら団長となり 海底地質調査を行い 油田埋蔵を確認

ところが、政府部内で、学術調査ならば、実施主体は総理府、地下資源調査なら、主管庁の通産省がやるべきだと紛糾した。官僚のくだらないなわばり争いである。調査主体が曖昧だとして、予算はお流れの状態になった。

新野、吉田らは、この事態に驚き、「日本の将来のためには、是が非でも政府レベルによる調査を行うべき」と窮状の打開策に乗り出した。

当初の三次調査までは、総理府が学術調査の形で行い、その後は通産省が地下資源調査として引き継いでいくとの方針で説得を重ねた。

必死の努力の甲斐あって、駆け込みの形で予算要求にこぎつけた。

総理府は、69年度第一次調査費2千万円余を予算要求したが、ところが、大蔵省の第一次査定の結果は零となり、彼らの奮闘で、ともかくも900万円の獲得に成功した。だが、この額で果たして調査を実施できるかが問題だった。

東海大松前重義学長は、僅か900万円しかない政府予算に唾然とした。

が、天下国家のためなら止むなしと、赤字を自腹覚悟で、快くひきうけた。

しかも調査内容は、エカフエが機上から磁気探査したものとは大違い、調査船東海大学丸二世(702ト)で航行しながら精密音響測深機や音波差探査・スパーカーを使った緻密な海底地形・地質調査だった。幸い、石油公団も3千万円を支出して、東海大にさらなる調査を委託することになった。



海洋調査船東海大学丸二世(702ト)(「ウェブサイト」より)

海底地質調査団長には、新野博士が選任された。彼は齢64だった、

尖閣海域は潮の流れが速く、海の荒い難所である。船上で、しかも昼夜連続の長きにわたる調査は体力的に厳しかった。加えて、研究室から、いきなり不慣れた最前線の探鉱現場である。だが、夢にまで見た調査だ。

彼は、直接調査の指揮を執ることを承諾した。

1969年6月日本政府総理府による第一次東海大学尖閣列島周辺海底地質調査が行われた。東海大から14名の調査員、20名の研究学生を助手に当て、石油公団から4名、さらに琉球大学、琉球政府から5名が特別参加して、約20日間かけて行われた。新野は連日の疲れもものとせず、調査団長の激務をこなしていった。

予定通りの調査を終え、那覇に戻ってきた時は、身体はへとへと疲れ切っていた。果たして、調査結果はどうだったか。油田は見つかっただろうか？

## 海底地質調査で 油田埋蔵を確認

新野団長は、連日の疲れも見せず、満面の笑顔で、記者会見に臨んだ。



尖閣列島調査団の記者会見において、新野弘調査団長(中央)は、満面の笑顔で、油田の埋蔵を確認したと報告。右隣が高岡大輔沖懇委員。(琉球新報 1969.7.9)

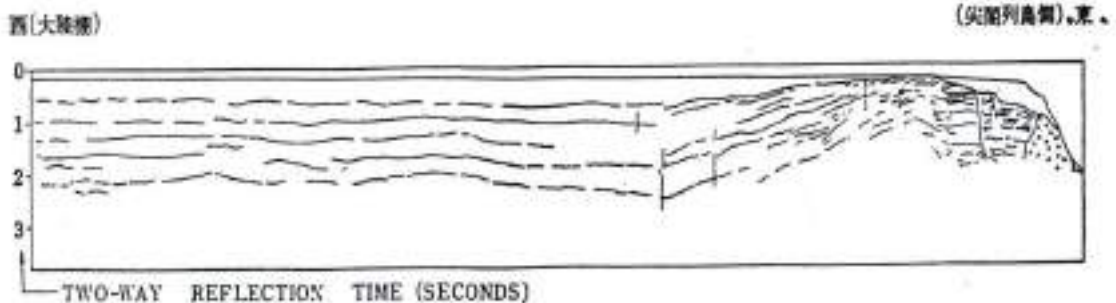
### 学術的には油田埋蔵を確認 尖閣列島調査団が記者会見 二年の調査が必要 試掘や開発はまだ危険

一、今回の調査の主体をなしたスパーカーによる海底探査は、延べ二千四百四十六キ。プロトンによる地磁気調査は三千五百キ。にわたった。底質調査では、七十地点で泥のサンプルをとり、予定の九五%まで調査を完了できた。

一、調査の結果、海成の第三紀層、つまり世界各国の同じ地質である堆積層が発見され、しかも、しゅう曲構造明らかに見られたことは大きな成果だと思ふ。…今回の調査で、その地層(第三紀層)は北緯二六度から二八度および東経一二三度から一二五度までの広い海域にわたっていることがわかった。おそらくこの地層は九州の男女列島近くまで広がっているのではないかと思う。

今回の調査で、少なくとも学術的には広大な油田があることがわかったわけだが、新野団長は「これでいきなり試掘したり、開発に乗り出すことは危険である。あと二年ほど調査を重ねて慎重にやるべきだ」としている。

(琉球新報 1969.7.9)



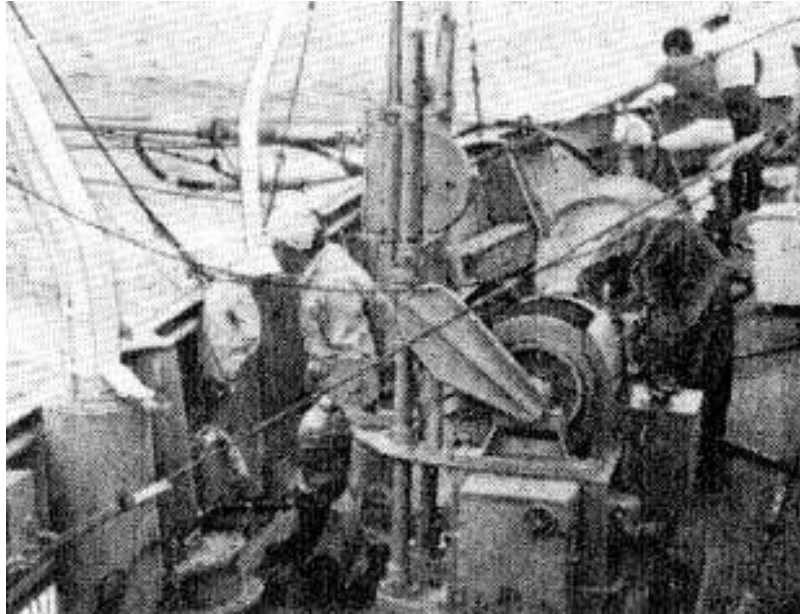
魚釣島より西方にかけての海底地質構造図(スパーカーによる調査記録)  
(前出「東支那海に宝庫をさぐる 尖閣列島周辺地質調査」より)

第二次学術調査(団長星野通平東海大教授)も予期した通りの成果だった。新野は、自負心を抑えながら東シナ海が世界一級の資源帯となるとしている。

昭和45年6月4日より6月27日に至る間…再度学術調査が行われた。…スパーカーの結果を総合すると、地質構造区分は第一次の調査結果と同じく大陸棚沈降部を挟んで、東西にゆるやかな褶曲帯が存在する。西側の支那大陸に近い褶曲帯には火成岩らしい岩が想定されているから ECAFE 調査の際尖閣列島付近の堆積岩は、大陸に向かって薄くなっている事実と共に想定された石油包蔵区域の範囲がほぼ明らかにされたと見てよからう。

…東支那海大陸棚の基盤には石油資源を包蔵すると想像される厚い新第三紀層があつて幾つかの地域に分かれているが、そのうち最も大規模のものは尖閣列島付近にある。先の ECAFE で地球物理学的調査を行って、且て日本の学者によって指示された。油田存在の可能性の事実として挙げるに至った。更に総理府による第1次、第2次学術調査によりその確信が深められた。東支那海大陸棚は北海と同じく国際地域であるから、将来沿岸国の協調よろしきを得ば、世界一級の資源帯となるであろう。

前出(「東支那海の宝庫をさぐる尖閣列島周辺の海底地質調査」)



地質調査はスパーカー使って、深度 3000 メートルまで行われた。  
(兼島清 1969.7)

ところが、翌 71 年の第三次調査は、大幅な遅れとなった。

### 出発さらに遅れる 中国、台湾の領有権主張で慎重

【東京】一日出発する予定だった第三次尖閣列島調査団は、二十間、出発を延期していたが、さらに遅れる見通しである。…中国や台湾から同列島の領有権主張があることもあって、本土政府は慎重を期しており…中国と台湾を刺激したくないという外交的配慮がある。…本土政府としては「尖閣列島の領有権は、日本にあることは、いささかの疑問もないし、外国と話し合う考えはまったくない」としているが、国際的に微妙な時期だけに慎重な態度をとっている。

(琉球新報 1971.6.21)

1 か月後の新聞は、第三次学術調査団一行 56 名は、20 間の調査日程を終え、那覇に帰港し、記者会見した旨が報じられた。

…星野団長と高岡顧問、岩下東海大教授は…行政府で記者会見し…つぎのように語った。…総理府の委託を受けてさる六九年いらい三回目の海洋学術調査を行ってきたが、学術調査としては最後のものである。この三年間に四〇〇幅の一千九百〇にわたるスパーカー(電波探査機)による海洋地質などを調べてきたが学術的には大三紀堆積岩があることや大陸ダナの背斜構造などから石油資源の埋蔵の可能性は強い。しかし、まだ学術的な基礎データを得た段階であり、実際に石油が出て開発に適するかどうかは、さらに綿密な調査をしたあとで

スト・ボーリングを実施してみなければならない。…こんごは調査を継続するかどうか、わからない。また、調査の主管についてもこれまでどおりに総理府が行うか、科学技術庁が実施するか確定していない…。

(八重山毎日新聞 1971.7.19)

この会見に新野の姿は見えなかったが、これまでの三回にわたる調査は、新野の予測を裏付け、石油資源の埋蔵の可能性は強いことが分かった。

あとは、テストボーリングをして、どの程度の石油が出るか見極めることだった。

### 日本政府 3次調査で打ち切る 新野 急逝する

地元琉球大学から第2次、3次調査に参加した兼島清教授は、次のように語っている。

総理府による東海大学丸Ⅱ世号による尖閣列島海底地質調査が3次にわたり実施された。琉大側から私を含め4人が一、二次調査に参加させてもらった。69年の一次調査のときは団長は新野弘教授、70年の二次は星野通平教授であった。その調査結果は尖閣列島海域は有望な石油・天然ガスが埋蔵の可能性をさらに裏付けるものだった。

…1975年10月、私は文部省の短期海外研修で、アメリカ加州のラホヤにあるスクリップス海洋研究所を訪ね、海底地質専門家のシェパード教授に会った。私が沖縄から来たというので、教授はすぐに海底地形の地図を持ち出し、尖閣列島の海底を示して、この海域には豊富な石油や天然ガスが埋蔵されている可能性がある」と説明し、沖縄に帰ったら皆にこの問題に真剣に取り組むよう話すべきだと熱っぽく語ってくれた。

最近台湾の北部海域で石油が出ており、その地質が尖閣列島のものと類似しているからだといいつつ、その出そうな場所はこの辺りだろうと鉛筆で示してくれた。残念なことに、そのレポートを失ってしまい、その場所ははっきり覚えていないが、台湾と尖閣列島魚釣島との中間のようだった。…尖閣列島の石油・天然ガス埋蔵の確信をますます強めた。

シェパード教授が言ったように、尖閣列島周辺海域には豊富に石油や天然ガスを埋蔵している。日本は、これから真剣に海底地質調査に取り組むべきだった。

いよいよとの矢先に、日本政府の尖閣列島海域の海底地質調査は、1971年6月東海大学丸Ⅱ世号による第三次調査(団長星野通平教授)を以て、なぜか打ち切りになってしまっていた。(この調査には私たち琉大側の参加はなかった)。

日本の海底地質調査が尻つぼみに終わったのは遺憾である。

(「尖閣研究 高良学術調査団資料集 下巻」 兼島清)

新野には、調査打ち切りは、不本意だった。

当初、三次調査までは、総理府が学術調査の形で行い、その後は通産省が地下資源調査として引き継いでいくとの方針だった。彼の長年にわたる努力がようやく実を結び、通産省による試掘ボーリング実施とか思われていたのに、調査打ち切りである。大いに落胆し、傷心した。

それから2年後のことである。

1973年3月、突如、新野博士は、急逝した。

享年68歳、これから本領発揮と期待されていただけに、早すぎた死は惜しまれた。わが国の尖閣油田—東シナ海ガス田開発にとって大きな痛手だった。

今日では、新野博士の偉大な業績は、殆んど知られていない。

1968年国連エカフエが黄海・東シナ海の海底油田を調査発表したことは知っていても、彼の論文がその契機になっていたことは知らない。

また、エカフエの発表で、中国は、尖閣諸島が石油の島と分かり、領有権を主張したことは知っていても、東シナ海海底油田の現状は知らない。

日本政府やマスコミがあまり報じない、したがって、国民の関心は薄い。

これはわが国にとって不幸なことである

東シナ海海底油田を発見したのは、国連エカフエや米海軍海洋局やメジャーではない。世界に先駆けて、存在を予言したのは、日本の海底地質学者新野弘博士である。私たち国民は、この事実を知り、これを誇りとしなければならない。

## 日本 先行して探査開発していたら 尖閣問題 起こらず？

新野博士を、海底地質学、とりわけ海底資源—海底石油研究にかり立てた動機は何だったか。昭和7年、彼は27歳の若さで、東シナ海の低質土収集に取り組んでいる。戦前の日本は、石油の9割以上を、海外油田、輸入に依存していた。

地質学徒にとって、国内油田発見が悲願だった。彼は、もしかするとこの広大な東シナ海に、海底油田があつたらと、低質調査に奮闘していた。

昭和10年代に入ると、日米関係は悪化の一途をたどり、米国、英国、中国、オランダによる「A B C D包囲」の経済制裁を受ける。

まさに「石油の一滴は、日本にとって血の一滴」となった。

昭和16(1941)年12月8日、石油を絶たれた日本は、ハワイ真珠湾を攻撃し、戦争に突入した。機先を制して南方に油田を確保したが、米軍の攻撃により、それも絶たれてしまった。

国内油田探索に、励んでいた地質学徒たちは、その悲劇を目のあたりにし、どのような思いに駆られただろうか。資源小国に生まれた悲哀を感じ、さらに熱い

思いで、己の使命の実現に取り組んでいったはずである。

新野も同様だった。30年に及ぶ獅子奮迅の努力の末、ついに、東シナ海に海底油田が存在する確信に至った。

彼は、国内石油業界に対して、東シナ海海底油田こそ、「…一刻も早く調査を開始したいと考える。外国油田への全面依存は必ずしも採るべき策の最上とはいえない。」(前掲)と、熱心に訴えた。

1960年アラビア石油の山下太郎は、サウジアラビアに海底大油田を掘り当てた。カフジ油田である。この快挙に、日本国中は、「日の丸油田」を仕留めたと沸き立った。さらに63年には、30キロ沖合でフート油田が発見された。

新野は、海底油田ブーム時代の一大到来と期待した。

この追い風を受けて、政府や国内石油業者が、東シナ海の海底油田に目を向け、調査してほしいと呼びかけた。中東アラビアは遠い。中東からの石油は20日間かけて、一万二千キロも旅して日本に、タンカーで運ばれて来るのだ。

日本列島のすぐ傍の東シナ海で、海底油田が噴き出すことも夢でない。

日本近海で、自国の海底油田が噴き出せば、実に素晴らしいではないか。

だが、なぜか、日本政府も、石油業界も、彼の提案を一顧だにしなかった。初の国内海底油田を掘り当てる千載一遇の好機を逸してしまった。

新野弘博士の論文に注目したのは国外の研究機関やメジャーだった。

その結果、国連エカフエ事務局に、CCOP(アジア沿海鉱物資源共同探査委員会)が設けられ、複数の国が参加して調査(油田探査)が実施された。

もしも、エカフエ以前に、彼の提言を取り入れて、世界に先駆けて、わが国が東シナ海尖閣諸島海域の油田探査を実施していたら、どうだっただろうか?

国連エカフエは、複数国参加した調査に乗り出すことはなかったはずである。

たとえエカフエが後から動いたとしても、調査主体は日本側にあり、協力申し入れ程度に止まっていたに違いない。

国民もまた、新野弘博士の30数年に及ぶ研究により、海底油田の存在が予言されたという偉大な事実を知り、国内最大油田の誕生を大いに期待し、喜んでいたのでないか。

このように、国際社会が日本の動向を注視している中、わが国は官民一体となって、尖閣油田の探査開発に邁進していたはずである。

わが国が先駆けて探査に踏み切っていた状況下では、中国による理不尽な尖閣諸島領有権主張のすけ入る隙も与えなかったであろう。

今日見るように一方的なガス田開発は引き起らなかったに違いない。

前出の兼島は、怒りを禁じえない。

現在、中国が東シナ海で石油・ガス田開発を一方的に、有利に進めている。それに比し、これまで海底地質調査を怠ってきた日本には何の動きもない。この現状を見るにつけ地団駄を踏むような悔しさを拭い得ない。

(前出「尖閣研究」兼島清)

中国

# 白樺ガス田供給開始か

## 浙江省の都市へと香港紙

【香港31日共同】中国系香港紙、大公報(電子版)は三十一日、東シナ海の日中中間線付近にある「白樺」(中国名・春晚)ガス田で中国側が昨年、天然ガス生産を開始し、沿海の浙江省寧波、紹興などの都市へ既に供給していると報じた。日本政府は、外交ルートを通じ中国政府に事実確認を求めている。

白樺については中国が「の」に対し、日本政府が開発を拒否。一月の日中首脳会談では共同開発の方向で早期解決を目指すことで一致したばかり。供給開始が事実ならば改善傾向が出てきた日中関係に悪影響を与えそうだ。

同紙報道によると、浙江省発展改革委員会が同省議会に当たる人民代表大会に提出した二〇〇六

—〇七年の経済・社会発展計画に関する報告書に、同省寧波と紹興を結ぶパイプラインが昨年開通、東シナ海から天然ガスの供給が始まったと記されていた。同紙は中国側による生産開始の初の公的な確認と指摘している。

今後パイプラインは杭州や上海などへ延長する方針だという。

白樺については中国政

府の当局者が昨年七月、「全面的な開発・生産段階に入った」と述べたと開発会社の中国海洋石油がウェブサイトで公表し

こバニコウ後日たよ川余と

中国のガス田開発

日中中間線  
日本主張のEEZ境界線

東シナ海

白樺(春晚)

中国が提案している共同開発海域

●は中国が開発中のガス田(春晚)は中国名

中国

紹興 寧波

浙江省

台湾

尖閣諸島

日本

沖縄

(琉球新報 2007.2.1)

この無様な状況を、新野博士は、どのような思いで見ているだろうか。

(了)